

日本史 問題 I

1904年にはじまった日露戦争はイギリスから見てどのような戦争であったか。図も参考にしながら、以下の語句をすべて用いて、350字以内で述べなさい。(語句の順序は自由に変えてよい。語句には下線を引くこと。句読点もそれぞれ1字に数える。)

三国協商 三国同盟 日英同盟 英露協商

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

注)清水勲監修『ビゴーがみた世紀末ニッポン』(平凡社、1996年)より転載。転載にあたり図中の文章を一部翻訳して組み込んだ。

日本史 問題Ⅱ

次の文章は古代から近世にかけての日本の代表的な絵画を概観したものである。これを読んで以下の問いに答えよ。

古代の絵画で本格的なものは、飛鳥時代には「法隆寺金堂壁画」などの優れた仏教絵画がある。また貴人の墓室壁面に極彩色で四神や星宿などが描かれた「高松塚古墳壁画」もある。奈良時代をへて平安時代に入ると「教王護国寺両界曼荼羅」や「高野山阿弥陀衆生来迎図」など、前の時代にはみられなかった宗教画が制作されるようになった。

中世の絵画では、平安時代末期に「源氏物語絵巻」「扇面古写経」などの絵巻物や絵画が盛んに制作されるようになった。室町時代の代表作の一つとしては、雪舟の「秋冬山水図」が知られている。この頃に土佐派や狩野派といった画家集団が誕生した。

近世に入ると、安土桃山時代の代表作として狩野永徳の「唐獅子図屏風」などがある。江戸時代には菱川師宣が美人画・役者などの風俗を描いた浮世絵の版画を始め、さらに多色刷浮世絵版画(錦絵)として完成した。

問 1 下線部①に関連し、この時代の絵画の特色と、制作当時の国際情勢や文化交流との関係について説明せよ。

問 2 下線部②に関連し、飛鳥・奈良時代とは異なる絵画が作成されるに至った宗教的背景について説明せよ。

問 3 下線部③に関連し、絵巻物などに描かれた題材と様式について説明せよ。

問 4 下線部④に関連し、雪舟が確立した画風の特徴と、その画風を習得した経緯について説明せよ。

問 5 下線部⑤に関連し、安土桃山時代に絵師を重用した階層について説明せよ。

問 6 下線部⑥に関連し、浮世絵が庶民に普及した理由について説明せよ。

日本史 問題Ⅲ

古代の歴史史料に関する次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。(史料は一部省略したり、書き改めたりしたところもある。)

歴史を研究するためには根拠資料が必要である。歴史資料には多様なものがあるが、ここでは文字で書き残された文献史料についてみていく。

古代史研究の上で不可欠な史料は、『日本書紀』にはじまる歴史書である。しかし、これは律令国家が支配の正当性を主張するために後世になって編纂したという面が強く、記述が妥当かどうか吟味が必要である。特に『日本書紀』は同時代史料に乏しい時代を対象としており、いわゆる郡評問題^①に代表されるように、編纂時点での制度や知識によって書き換えられているところがあるので、金石文や木簡^②などの同時代史料と照合するなど、史料批判が必要である。続く『続日本紀』は、同時代史料に基づいて編纂されているので、比較的信頼できる部分が多いが、ある事件^③について、当初は詳細な記述があったものがその後削除されて簡略なものとなり、さらに後に復活、削除が繰り返されるという経緯をたどるなど、その時々^④の政治情勢によって書き換えがなされた部分もある。なお、このことは、省略されなかった記述が『日本紀略』という史料に収録されたことで判明した。

平安時代中期以降は貴族の日記が重要な史料となる。当時の作法では、毎朝、前日の日記を書くことになっていたから、これは同時代史料と言えるものであり、日々の具体的な営みを知ることができる。しかし、日記の場合も、都合の悪いことは書かない、当時の人々にとって当然のことは書かない、などの問題があるので、他の史料と照合して吟味することが必要である。例えば、藤原道長の日記『御堂関白記』の長和4(1015)年8月1日条には、「大内に参る(内裏に参上した)」としか書かれていないが、同時期の藤原実資の日記『小右記』をみると、その日、当時道長と対立していた三条天皇^④の退位をめぐる極めて重大な事項が、道長と天皇との間で話し合われていたことがわかる。立場を異にする二人の日記が残っていることが、歴史を明らかにする上で重要な意味を持っているのである。

問 1 下線部①に関連して、次の史料を参考に、郡司の任命基準が国司とどのように異なるか、説明せよ。

史料1 『養老令』選叙令郡司条

凡そ郡司には、性識清廉にして時の務めに堪ふる者を取りて、大領・少領とせよ。……それ大領・少領、才用同じくは、先づ国造を取れ。

注

「大領」は郡の長官、「少領」は郡の次官。

問 2 下線部②に関連して、次の史料は地方で出土した木簡のうちの一つである(下半分が欠けており、適宜省略したり補ったりしている)。注を参考に、これを読んでわかることを述べよ。

史料2 長野県屋代遺跡群出土木簡

符す。屋代郷長里正ら。敷^{しましろ}席二枚……(以下物品名省略)

……神の宮室を造る人夫、また殿を造る人十人、

(これらの物資を)持たしめて(これらの人員を)火急に召す。

(遅れたならば)罪科(に処す)。 少領

注

「符」とは、令制で上位の官司から下位の者に命令を下達する文書。「符」の次に書かれる部分が文書の宛先に当たる。

「屋代郷」は信濃国埴科郡に属する郷。

「屋代郷」の「郷」は、八世紀のある時点から令制の「里」を改称したもの。

「里正」の「里」は、一時期「郷」の下位の行政単位として設けられたもの。

「郷長」「里正」は、それぞれの責任者。

「少領」は、この文書木簡の差出側に当たる。

問 3 下線部③について、次の史料は「ある事件」に関する、削除される前の記事である。これを読んで、「ある事件」について説明せよ。

史料 3 『日本紀略』延暦 4 (785) 年 9 月 丙辰 条

故中納言大伴家持とあい謀りて曰く、「宜しく大伴佐伯両氏に唱へて以て(藤原)種繼を除くべし」と。よって、皇太子に啓して遂にそのことを行ふ。

(この事件で犯人とされた大伴繼人および佐伯高成らの自白。)

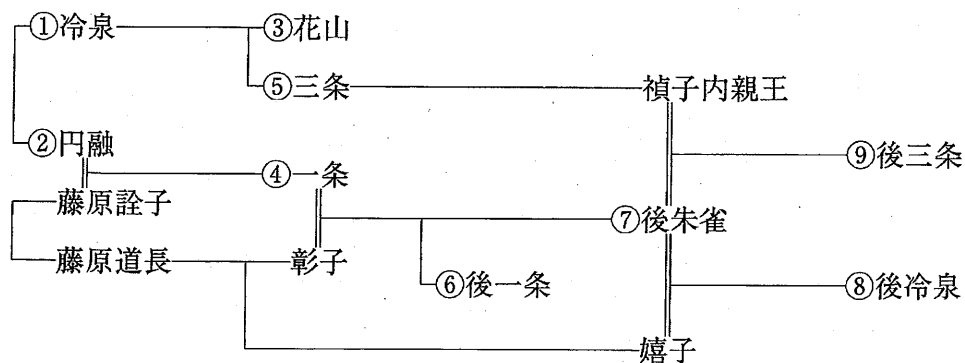
問 4 下線部④に関連して、下の図 1 は三条天皇前後の天皇系図である。三条天皇の男子の一人は、父天皇の退位後、後一条天皇の皇太子となるが、道長の権力をはばかり、まもなくこれを退き、他の男子も天皇となることはなかった。しかし、三条天皇の女子であった禎子内親王と後朱雀天皇との間に生まれた男子が後三条天皇として即位することになった。史料 4 および図 1 の系図を参考にして、後三条天皇の時代の特徴について述べよ。

史料 4 『百練抄』延久元(1069)年 2 月 23 日条および閏 2 月 21 日条

寛徳二(1045)年以後の新立荘園を停止す。たとひ、彼の年以往といへども、立券分明ならず、国務に妨げあらば、同じく停止のよし宣下す。

はじめて記録荘園券契所を置く。

図 1 天皇系図(丸数字は天皇即位順)



日本史 問題IV

次に掲げた史料は、『太平記』のなかの一節である。この史料をよみ、室町幕府に関する以下の問いに答えよ。(史料は、一部省略したり、書き改めたりしたところもある。)

山名時氏、御方^{みかた}に参らるる事

山名時氏・子息師氏^{もろし}は、近年御敵に成りて、南方^①と引き合いて、両度まで都を傾けしかば、將軍の御為には上なき御敵なりしかども、内々縁に属して(注1)、「両度の不義、全く將軍の御世^{あやが}を危め奉らんとには非ず。ただ佐々木高氏が余りに本意無かりし振舞を思い知らせんためばかりにて候き。その罪科^{ゆうめん}を御宥免^②有りて、この間領知の国々をだにも恩補せられ候はば、御方に参て忠を致すべき」由をぞ申したりける。げにも此の人御方に成るならば、国々の官方^③、力を落とすのみならず、西国もまた無為(注2)なるべしとて、近年押さえて領知せられつる因幡・伯耆の外、丹波・丹後・美作、五か国の守護職^④を充て行なわれければ、元来多年旧功の人々、皆手を空しくして、時氏父子の栄花、時ならぬ春を得たり。是をそねみて述懐する者共、「多く所領^⑤を持たんと思わば、ただ御敵にこそ成るべかりけれ」と、口をひそめけれども甲斐なし。

(注1) 内々縁に属して…内々の人脈をもって申し入れること。

(注2) 無為…戦乱等がおさまり無事であること。

問1 下線部①と③とは同じ意味であるが、その内容に触れつつ、『太平記』とはどのような書物であるかを説明せよ。

問2 下線部②に関連して、將軍足利義詮は貞治2(1363)年から翌年にかけて、山名時氏父子を実際に「宥免」している。義詮はなぜ彼らを「宥免」したのか、また義詮は「宥免」にあたりどのような特別な対応を示しているか、史料に即して述べよ。

問 3 下線部④について、鎌倉時代と比較して、管轄国に対する権限が史料に描かれているような状況と連動しながら大幅に拡大した経緯について、幕府の著名な法令名を挙げながら略述せよ。

問 4 山名時氏の子にあたる氏清らは、義詮の子で将軍の地位をついだ足利義満によって討たれ、山名氏の勢力は大幅に削減された。この内乱の名称を示しつつ、義満が敗北の危険を冒してでも山名氏の勢力削減をめざした意図について、下線部⑤の解釈を中心に考察せよ。

日本史 問題 V

近世から近現代の災害に関する次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。なお、A～Fは年代順に並んでいるとは限らない。史料は、一部省略したり、書き改めたりしたところもある。

- A この地震は、日米和親条約が締結された年の11月4日・5日(旧暦)に連続して発生した。関東から九州までの広い範囲で強い揺れにみまわれ、沿岸を津波が襲った。このとき下田湾に碇泊していたロシア使節の乗艦も津波により大破した。
- B 淡路島北部を震源とするこの地震では兵庫県を中心に多くの建物が倒壊し、交通網は寸断され、都市機能が破壊された。被災地には全国から大勢のボランティアがかけつけ、さまざまな支援活動に取り組んだ。
- C 幕末に発生したこの地震で江戸市中とその周辺は大震動に襲われ、大名屋敷や町人地の家屋の多くが倒壊等の被害にあった。徳川斉昭の側近で藩政改革を推進した藤田東湖もこの地震で圧死した。
- D アジア・太平洋戦争末期に発生したこの地震により、東海地方を中心に強い揺れに見舞われた。その37日後にも愛知県東部で三河地震が発生し、二つの地震の死者は3000人を超えた。しかし、被害に関する報道は厳しく統制された。
- E 将軍徳川綱吉の時代に発生したこの地震は、江戸時代における最大規模の地震であり、被害も広域に及んだ。その余韻もさめやらぬなか、地震発生49日後に富士山が噴火し、その火山灰が関東を覆った。
- F 近代化した首都圏を襲ったこの地震は、昼食時と重なったため火災が広がり、死者・行方不明者は10万人以上を数えた。地震発生後から朝鮮人暴動の流言が広まり、それを信じた人びとによって多数の朝鮮人が殺害される事件が発生した。

問 1 Aの下線部の使節との間で結ばれた条約において、箱館・下田・長崎の三港を開くとした他に、日露間の懸案事項についての取り決めもなされた。日米和親条約にはない、その取り決めの内容について説明せよ。

問 2 Bの地震が発生した年の8月に、当時の首相は「戦後50周年の終戦記念日にあたって」と題する談話を発表した。この談話の要点を述べよ。

問 3 Cの下線部の人物たちが主導した学問が幕末の思想や運動に与えた影響について述べよ。

問 4 Dについて、地震の被害情報が大きく報道されず、隠されたのはなぜだと思うか。戦時下の手記である次の史料を参考にしながら、考えられるところを述べよ。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

(水谷鋼一・織田三乗『日本列島空襲戦災誌』より)

問 5 Fについて、流言によって多くの朝鮮人が殺害された背景として考えられるところを述べよ。

問 6 A～Fの「この地震」に当てはまるものを次の年表から選んで番号で答えよ。

宝永 4 (1707)年	宝永地震	1
文政 2 (1819)年	文政近江地震	2
弘化 4 (1847)年	善光寺地震	3
安政元(1854)年	安政東海・南海地震	4
安政 2 (1855)年	安政江戸地震	5
安政 5 (1858)年	飛越地震	6
明治 24(1891)年	濃尾地震	7
大正 12(1923)年	大正関東地震(関東大震災)	8
昭和 19(1944)年	昭和東南海地震	9
昭和 21(1946)年	昭和南海地震	10
昭和 23(1948)年	福井地震	11
平成 7 (1995)年	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)	12
平成 23(2011)年	東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)	13